

中央アジア・オアシス地帯における都市の成立・展開過程の研究

—ウズベキスタン共和国ミングテパ遺跡発掘調査(2023年度)—

ベグマトフ・アリシエル サマルカンド国立大学考古学学科准教授

宇佐美智之 京都芸術大学専任講師

ラフマノフ・ハウスニディン サマルカンド考古学研究所研究員

オモノフ・ディルムロド サマルカンド考古学研究所博士後期課程

ボゴモロフ・ゲンナディー ウズベキスタン科学アカデミー民族考古学研究センター・上等研究員

ミルザアフメドフ・シロジ サマルカンド考古学研究所研究員

デクルイネール・デルフィーヌ パリ国立自然史博物館博士後期課程

ゴルモハマディ・ザフラ ミュンスター大学博士後期課程

The Formation and Development of Cities in the Oases of Central Asia: Excavations at Mingtepa in Uzbekistan (2023)

BEGMATOV, Alisher Associate Professor, Department of Archaeology, Samarkand State University

USAMI, Tomoyuki Junior Associate Professor, Kyoto University of the Arts

RAKHMONOV, Husnidin Research Fellow, Samarkand Institute of Archaeology

OMONOV, Dilmurod PhD candidate, Samarkand Institute of Archaeology

BOGOMOLOV, Gennadiy Uzbekistan Academy of Science, National Center for Archaeology, Senior Research Fellow

MIRZAAHMEDOV, Siroj Research Fellow, Samarkand Institute of Archaeology

DECRUYENAERE, Delphine PhD Candidate, National Museum of Natural History of Paris

GOLMOHAMMADI, Zahra PhD candidate, University of Münster

1. はじめに

ミングテパ遺跡(39° 47' 32N 67° 10' 11E)は、サマルカンド市(アフラシアブ遺跡)の北東約 20 km の地点(ジョンボイ地区)に所在する。遺跡においては約 35 ha が現状残されており、北部に設置された二重の城壁が特徴的である(図 1)。また、城壁外にもいくつかの高まりが残存しており、その性格の把握も課題である。

この遺跡については、従来アラビア語や漢文史料に記録されるカブダンないし曹国に比定されてきた。2021 年から本研究プロジェクトによって具体的な調査・検討が進められつつある。

2023 年度の調査では、後述のトレンチ 3 を中心に発掘を進めた。また、2021 年度に発掘したトレンチ 4 の続きとミングテパ遺跡東郊外にある埋葬施設と推定される部分の発掘も実施している。

2. トレンチ 3 の調査について

昨年度の発掘によりトレンチ 3 の東にある 3.6 区画

より北東の高い部分に 10×10 m の規模の新たなトレンチを追加し、3.7(北西部、3.6 の続き)、3.8(南西部)、3.9(南東部)、3.10(北東部)という四つの区画に分けた。これらの区画に沿って発掘を進め、出土遺物の記録を行った。なお今回新たに検出した壁は日干し煉瓦で作られているが、昨年度の調査までに確認されているレンガのサイズ((50~52)×(25~26)×8 cm)と同様であることが判明した(図 2a ; 2b)。

3.7 区画から検出したアーチ型通路・部屋は、昨年の 3.6 区画で確認した遺構と繋がることが明らかになった。またこの区画の床面に到達し、ここの通路・部屋は幅約 3 m であり、パフサからなるスファ(ベッド)があり、2021~2022 年度に確認したこれまでの通路より幅広いことが明らかになった。来年以降は、この通路・部屋全体を把握するために 3.6 区画の西側残りの部分も床面まで掘り下げ、この通路や部屋全体の規模を明らかにする必要がある。

3.8 区画に別のアーチ型の屋根を持つ通路・部屋が検出され、3.6~3.7 区画の通路・部屋と繋がることが今年の調査で明らかになった(図 3a)。なお、ここの

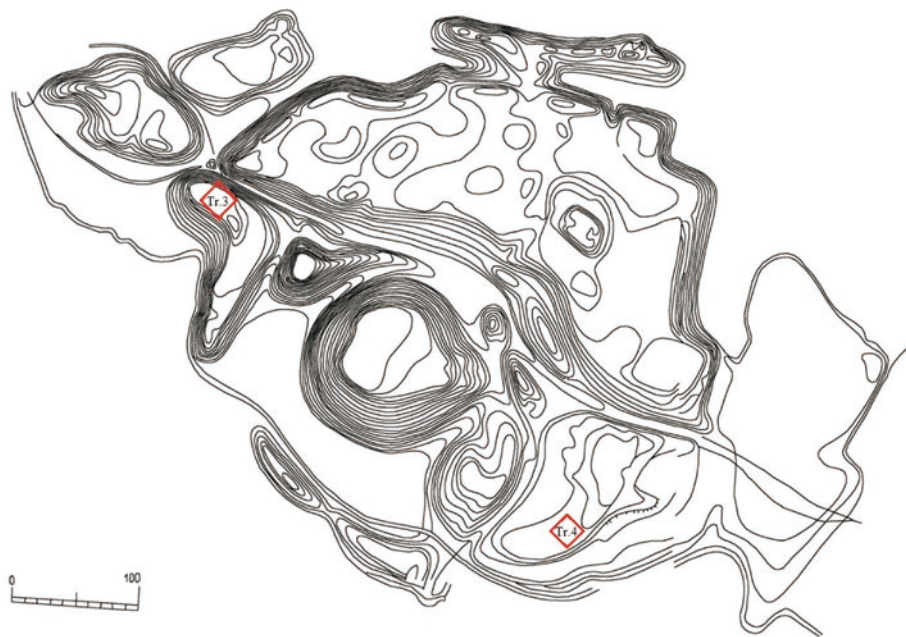


図1 ミングテパ遺跡全体図



図2a トレンチ3拡大部の全体図

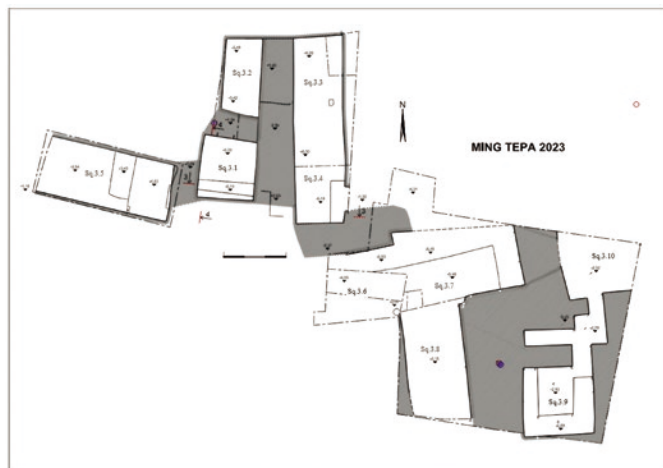


図2b トレンチ3図面

トレンチからは火災層が明確に確認され、その中から数点の貨幣が出土した。これらのほとんどは8世紀中頃以降のものと考えられ、火災自体は8世紀後半に生じたことが推測される(図7)。また、この区画から一点ササン朝の銀貨も出土した(図8)。

今回の発掘調査を通して、3.9区画から検出した正方形部屋の最下層まで確認が行われ、この部屋の全体構造が把握された。部屋は約3.5×3.5mの正方形であり、入口の幅は約1mである。スファの幅は東部と南部で1mであり、西部では0.7mである(図3b)。なお、この部屋と出入り口で繋がる3.10区画は、他の区画(3.1～3.8)とは、直接繋がらず、個別の施設となっていることが明らかになった。

3. トレンチ4の調査について

2021年度トレンチ4を発掘した際に火災層があることが確認されていたが、このトレンチの火災層と今年明確になったトレンチ3の火災層は同じ時期のものと推定される。上述のように、3.8区画から出土する貨幣を基に火災は、8世紀後半に起きた可能性が高いことが推定されるが、これをより正確に知る目的で、トレンチ4を東に約2m拡大し、火災層、殊にそこから出土する遺物に特に重点をおき、発掘を進めている(図4)。一部については水洗選別を行い、多量の動物の骨や植物などの有機物が確認された。



図 3a 3.8 区画のアーチ型通路・部屋



図 3b 3.9 区画の正方形部屋



図 4 トレンチ 4 を拡大する様子



図 5 埋葬施設(?)のテストトレンチ



4. 埋葬施設(?)

上で触れたように、2023年度の調査では、ミング

テパ遺跡東郊外にある丘においてテストトレンチを実施した(図5)。当該遺跡東側の地区については、いくつかの高まりが認められ、それらがクルガン(古墳)であるかどうかの確認調査を目的としたものである。ま

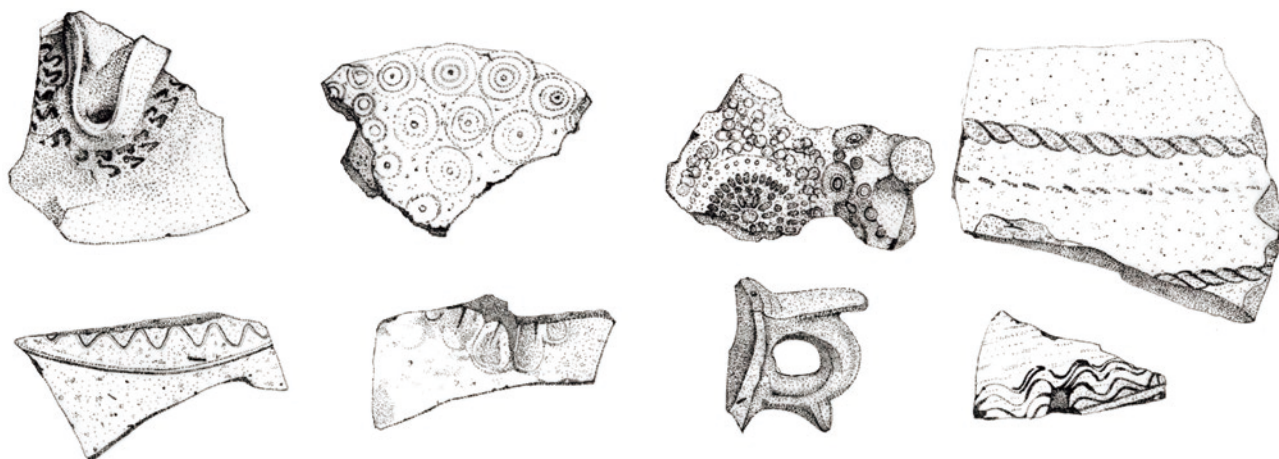


図6 出土土器など



図7 ソグドの銅製貨幣8世半ば頃(テュルガル王か?)



図8 ササン朝バフラーム4世の銀貨

たこの地区ではレンガ工場により破壊が急速に進んでおり、それを食い止める意図もあった。約19×12.8mの小高い丘の中央あたりを南北に幅約1mの細長いトレンチを設けた。通路を挟むプラットフォームと壁が検出し、通路の部分では、人骨が確認され、埋葬施設であった可能性が浮上した。

5. 出土遺物について

2023年度も多量の土器片や動物の骨などに加え、小像や貨幣などが出土し、現在クリーニング・測量・撮影を進めているところである。

5.1 土器など

今年度も調査中に出土した遺物の中では土器片が最も多いが、その大半が西暦6～8世紀頃のものであり、現在撮影・実測・図化の作業を進めているところである。これまでに図化作業が完了した一部の土器片は図6の通りである。

5.2 貨幣

主にトレンチ3の3.8区画から貨幣が数点出土した。これらの大半がソグド銅製貨幣である(図7)。一点銀貨が出土し、クリーニングした結果、ササン朝ペルシアの第12代主君(在位紀元後388～399年)であるバフラーム(Bahrām/Warhrān)4世のものであると推定される(図8)。また、地元の人が遺跡周辺から収集した

貨幣も見せてくれた。彼らが持つ貨幣も殆どが7～8世紀頃のソグドのものである。約3割程度が「サメタンのナナイヴァット」というソグド語碑文を持つものであり、このタイプの貨幣はこの遺跡の重要性を示すものと考えられる。

6. おわりに

ソグドの北東部に位置するミングテパ遺跡は、シルクロードにおいて東からソグド本土に入るゲートウェイと呼びうる位置を占める。今後の調査に委ねられる部分は多いが、重要な役割を担う都市遺跡の一つであった可能性が想定されるところである。今後もさらに発掘調査を進めて、この都市の性格や変遷について議論を深めていきたい。

■参考文献

- ・ベグマトフ・アリシエル、宇佐美智之、ラフマノフ・ホウスニディン、サンディボエフ・アリシエル、ボゴモロフ・ゲンナディー、ミルザアフメドフ・シロジ 2022「中央アジア・オアシス地帯における都市の成立と展開—ウズベキスタン共和国ミングテパ遺跡発掘調査(2021年度)—」『第29回西アジア発掘調査報告会報告集』18-22頁 日本西アジア考古学会。
- ・ベグマトフ・アリシエル、宇佐美智之、ラフマノフ・ホウスニディン、デクルイネール・デルフィース、ミルザアフメドフ・シロジ 2023「中央アジア・オアシス地帯における都市の成立・展開過程の研究—ウズベキスタン共和国ミングテパ遺跡発掘調査(2022年度)—」『第30回西アジア発掘調査報告会報告集』124-127頁 日本西アジア考古学会。